

# 史跡 八幡山古墳

範 囲 確 認 調 査 報 告 書

2002

前橋市教育委員会

## 序 文

前橋市は、北に赤城山、西に榛名山、南西に妙義山の上毛三山がそびえ、その赤城山と榛名山の裾野の間を南北に利根川が流れる水と緑にあふれた地であります。

前橋は古代より豊かな文化があふれる地であり、東日本でも際だった内容を示しています。今から約2万8千年前の旧石器を始めとして、11遺跡を数える国指定の史跡、関東の華とうたわれた前橋城に関するもの等多くの文化財が残されています。

自然環境に恵まれたこの地では、古代からの人々の生活の跡が市内ほぼ全域にわたり残されています。古代の人々が暮らした家の跡や使用した石器や土器などの道具、水田跡なども多く、周辺の埋蔵文化財発掘調査によって多くの新しい知見が集積されています。

八幡山古墳は、前橋市南部に連なる朝倉広瀬古墳群の中核をなす古墳であり、周辺においても同時代の古墳・遺跡が數多く発見されています。

今回実施した範囲確認調査は過去2度にわたり実施された範囲確認調査において未着手であった範囲を中心に行い、築造当時の周堀の状況を含め、およそその古墳周堀の範囲を想定しうる資料を得ることができました。

発掘調査にあたり、ご協力いただきました各関係機関の方々、地元関係者、調査に従事されました皆様に感謝とお礼を申し上げます。

平成15年3月

前橋市教育委員会

教育長 桜井直紀

## 例　　言

1. 本報告書は、史跡八幡山古墳範囲確認調査報告書である。
  2. 遺跡の所在地 群馬県前橋市朝倉町四丁目9番地の3ほか
  3. 八幡山古墳が国指定史跡となったのは、昭和24年7月13日、追加指定は昭和55年3月22日である。
  4. 調査事業主体は前橋市教育委員会である。
- 調査担当者 高山 剛（前橋市教育委員会 文化財保護課）  
小峰 篤（同 上）  
鈴木雅浩（同 上）  
井上唯雄（前橋市教育委員会 文化財保護課 文化財整備指導員）
- 整理担当者 高山 剛、小峰 篤
5. 発掘調査期間 平成14年7月2日～平成14年7月12日
  6. 整理期間 平成14年7月15日～平成15年3月18日

## 凡　　例

1. 採図中に使用した北は、座標北である。
2. 採図に、建設省国土地理院発行の1/20万地形図（前橋、高崎）1/2.5万地形図（前橋・大胡・高崎・伊勢崎）を使用した。
3. 本遺跡の略称は、14G52である。
4. 実測図の縮尺は以下のとおりである。  
全体平面図……1/1,500  
土層断面図……1/60
5. 本文中の基本土層・各トレンチ土層断面図の注記については、「新版標準土色帖」1995年度版を参照した。粘性と締まりの記号については以下のとおりである。  
○粘性・○締まり……あり  
△粘性・△締まり……ややあり  
×粘性・×締まり……なし
6. 本書の原稿執筆編集は高山・小峰が行った。  
なお、VI章は井上唯雄（前橋市教育委員会文化財保護課文化財整備指導員）が執筆した。
7. 調査・整理にあたっては、  
内藤 孝、赤城 美代子、粟岡エミ子、生形かほる、佐野貴恵子、戸丸澄江、船津明美、  
松田富美子、綿貫綾子のご協力を得た。（順不同）
8. 調査に際しては、下記の諸機関にご指導・ご協力をいただいた。  
文化庁 群馬県教育委員会（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団 井上測量設計（株）
9. これまでの発掘調査で出土した遺物については、前橋市教育委員会文化財保護課で保管している。
10. 今回報告書を作成するに当たり、第1次調査報告書（『八幡山古墳周辺調査報告書』前橋市教育委員会 1966）・第2次調査報告書（『平成10年度市内遺跡報告書』前橋市教育委員会 1999）を一部抜粋し再録した。第9図のCトレンチ土層断面図・出土土器実測図、第10図のBトレンチ土層断面図は今回が初掲載である。

# 目 次

序 文 .....	i
例 言 .....	ii
凡 例 .....	ii
I 章 調査経過と発掘方法 .....	1
1. 調査に至る経緯 .....	1
2. 調査方法と経過 .....	1
II 章 調査地区の地理的歴史的環境 .....	2
1. 立地 .....	2
2. 歴史的環境 .....	2
III 章 基本層序とテフラ .....	6
1. 基本層序 .....	6
2. 鍵層としてのテフラ .....	7
IV 章 平成14年度調査 .....	9
1. トレンチの設定 .....	9
2. 1号トレンチ .....	9
3. 2号トレンチ .....	9
4. 3号トレンチ .....	10
5. 4号トレンチ .....	10
6. 5号トレンチ .....	11
7. 6号トレンチ .....	11
V 章 過去の調査概要 .....	12
1. 第1次調査 .....	12
2. 第2次調査 .....	13
VI 章 まとめ .....	14
1. 規模 .....	14
(1) 墳丘 .....	14
(2) 周塙範囲の確認 .....	14
2. 築造時期 .....	16
(1) 墳丘出土土器 .....	16
(2) 火山噴出物 .....	16
3. むすび .....	17

## 挿 図

第1図 位置図 .....	3
第2図 周辺遺跡図 .....	4
第3図 新旧トレンチ位置図 .....	19
第4図 1・2号トレンチ土層断面図 .....	20
第5図 3・4号トレンチ土層断面図 .....	21
第6図 5・6号トレンチ土層断面図 .....	22
第7図 旧地籍図 .....	23
第8図 周堀想定範囲図 .....	24
第9図 平成10年度 第2次調査 Aトレンチ平面図 .....	25
A・Cトレンチ土層断面図 .....	25
Cトレンチ出土土器実測図 .....	25
第10図 平成10年度 第2次調査 Bトレンチ土層断面図 .....	26

## 写 真 図 版

図版1 墳丘全景 .....	27
図版2 平成14年度 第3次調査(1) .....	28
図版3 平成14年度 第3次調査(2) .....	29
図版4 平成10年度 第2次調査 .....	30

## I 章 調査経過と発掘方法

### 1. 調査に至る経緯

八幡山古墳は、東日本最大の規模をもつ前方後方墳として整った姿を保ってきている。後方部墳頂にはかつて八幡宮が祭られ、人々の崇敬の対象となってきたこともあり、昭和10年の全県下の古墳の悉皆調査でも旧勢多郡上川淵村の67号墳として『上毛古墳綜覧』(群馬県 1938) に登載されている。所在は朝倉字若宮にあり、3筆に分かれる1筆は八幡神社として18畝12歩の面積が記載されている。その規模の欄には、径444尺(133.2m)、幅246尺(73.8m)とされ、現況の数値と差がないところをみると、古くからの形状が変更されずに保存されてきていることが分かる。また、発掘の有無については「前方部半面ト後円部頂上発掘サル」と備考欄にある。里人の伝承によれば、墳頂下1.5m程の所に玉石敷の部分があったとされているが、詳細は不明である。

旧状をよく留めるこの古墳は、「其の規模の大なること 原型をよく存することに於て県下の代表的古墳の一なること」、「前方後方墳として県下他に例を見ざる形式なること」、「開墾の進行に伴い県下古墳の破壊されつつある折柄早く保存の途を講ずべき要あること」などの理由により、昭和24年7月13日に国の史跡に指定され、墳丘部分を中心に保存の網がかけられることになった。この時点では古墳の周辺に桑畠などもある田園風景の中にあったが、高度経済成長期になって開発の気運が高まり、昭和40年代になるとこの地域に広瀬団地造成計画が持ち上がり、昭和41年には周辺の整地作業が開始されることになった。これに伴って、八幡山古墳の範囲を確定する必要に迫られたことから、昭和41年12月及び42年2月の2回にわたり周堀部分の確認を目的とした第1次発掘調査が実施され、後方部北側・西側と前方部南側にそれぞれトレントンチ及びテストピットが入れられている(前橋市教育委員会 1966)。更に地域の開発の進行する中で周堀部分も含めた保存を図る目的で、昭和55年3月22日に指定範囲が拡げられた。

統いての第2次調査は、それから30年あまり経った平成10年度(平成11年2月)に周堀推定地を土地開発公社が取得するに伴い実施されており、西側くびれ部に接した取得地に3箇所のトレントンチを入れている。これらの過去の調査では葺石根石や周堀内の土層堆積状況等を把握・記録し一応の成果を得ているが、2度の調査においても、墳丘東側は調査の手が及んでいなかったこと、また、場所によっては耕作物の関係で連続的に土層堆積が確認できなかつたこと等の事情により、古墳範囲の確定には未だかなりの不確定要素を残す状態であった。

このような状況の中、土地開発公社所有地の史跡地への追加指定及び公有地化が進められる状況が開けた。これにより、過去2度の調査で残った不確定要素が解明できる機会を得られ、前橋市教育委員会が調査主体となり、文化庁・群馬県教育委員会と事前協議並びに調整を経た後、過去の調査結果を踏まえた上で確認調査を実施することとなった。

### 2. 調査方法と経過

今回の調査は平成14年7月2日から平成14年7月12日まで行った。調査体制は、調査担当職員3名、文化財整備指導員1名、発掘作業員8名の計12名である。古墳兆域の範囲確認を目指し、東西南北方向に計6本の確認トレントンチを設定して調査を実施した(第3図参照)。調査期間が限ら-

れていたため、作業効率を考慮し東部の公園内部に入るトレンチ(4・5号トレンチ)とそれ以外の部分に入るトレンチ(1・2・3・6号トレンチ)で調査区を二分した。最初に3号トレンチ、続いて2・1・6号トレンチの順で7月2日から7月5日までに4本のトレンチ調査を終了した。週末を挟み7月8日から7月12日まで公園内部の4・5号トレンチ2本の調査を行った。

調査手順は、トレンチ掘削後発掘作業員がトレンチ底面と断面を精査し、調査担当者による土層断面の確認とその写真撮影を行い、最後にトレンチ断面の測量作業という流れであった。2・3・6号トレンチの土層堆積状況は後世の搅乱を受けておらず比較的良好であった。しかし、1号トレンチは以前駐車場であった場所であり、土層が搅乱されている箇所がかなり見受けられた。また、墳丘東側に設定した4号トレンチは過去に行われた公園造成の際に土がかなり動かされていた模様で、土層の乱れが著しく測量が困難な状態であった。さらに、5号トレンチについても、公園内部から引かれている水道管等の埋設物の位置が不確定な状況である上に、公園樹木の保護のため根を切断することができないという事情もあったため、トレンチを深く掘削することが不可能な状況であった。

調査時期がちょうど梅雨時でもあり、天候が心配されたが、調査終了間際に台風に見舞われた以外は概ね天候には恵まれており、7月12日に現地での調査を終了した。

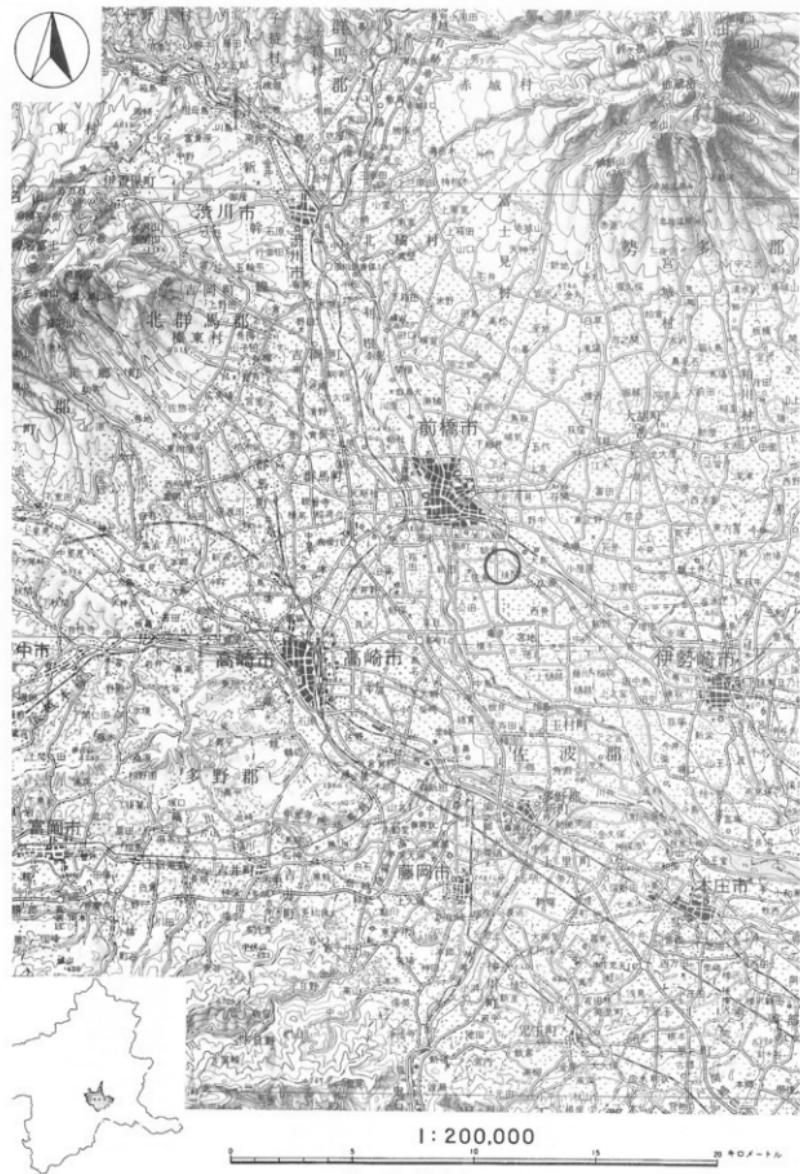
## II章 調査地区の地理的歴史的環境

### 1. 立地

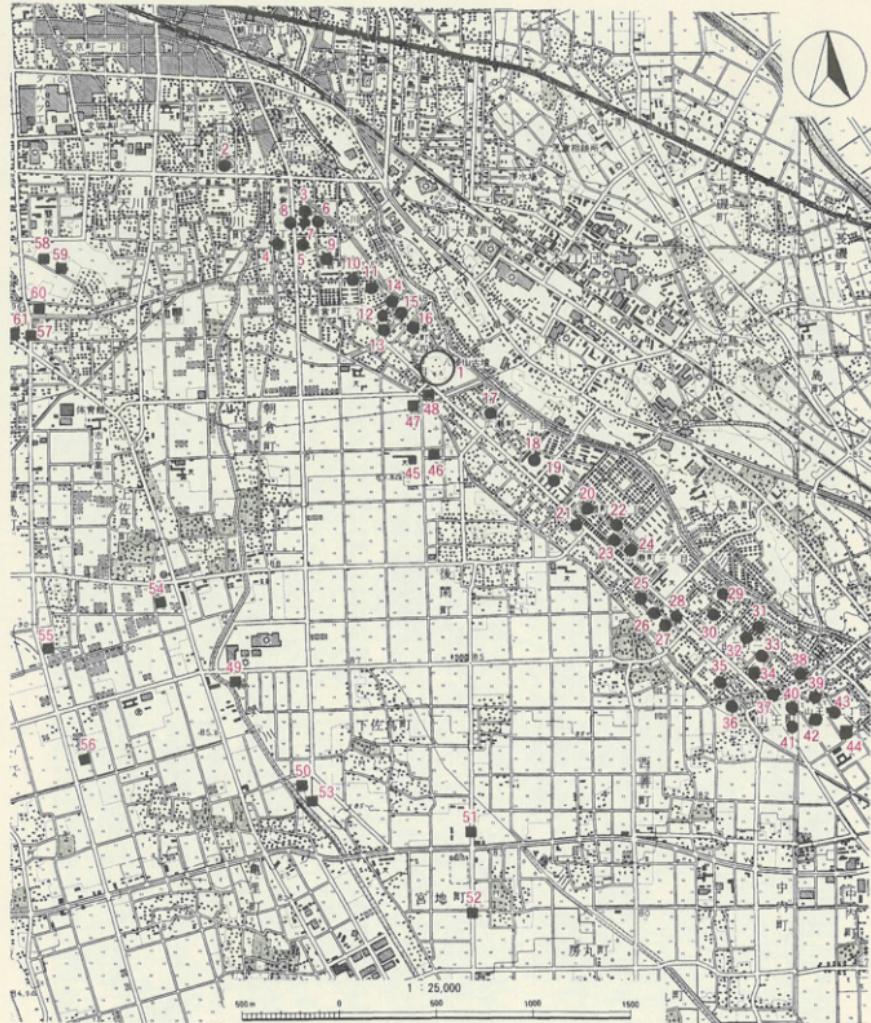
前橋市は、地質・地形から東北部の赤城火山斜面、南西部の前橋台地の利根川右岸、南部から南西部にかけての前橋台地の利根川左岸、東部の広瀬川低地帯の4つの地域に分けられる。八幡山古墳は、前橋市街地より南東へ約4kmの前橋台地東縁部を南流する広瀬川右岸の自然堤防上に位置する。この自然堤防は帶状に南東方向に連続しており、古墳群が形成されている。また、その西に開ける部分は低平な地が広がっている。この部分は以前は水田や畑の広がる農村地帯だったが、近年宅地開発や幹線道路などのインフラの整備が進み、市内でも規模の大きい広瀬團地を抱える市街化区域に変貌している。また、広瀬川左岸の低地帯についても主要地方道前橋館林線の沿線を中心に宅地化が進んでいる。

### 2. 歴史的環境

八幡山古墳は、北は文京町から南は東善町までの約6kmの地域にまたがる県内でも有数の古墳群である朝倉広瀬古墳群の盟主墳として位置づけられる。この古墳群はおよそ7つの支群に分けられ、帶状に古墳が連なる状況を呈している。地形的にこの部分が自然堤防上に高まりをみせていたことからくる古墳群の占地と思われ、その南から西にかけて広大な平地が広がる。『上毛古墳総覧』によれば、分布調査をした昭和10年頃この周辺には大小合わせて154基の古墳が確認されていた。だが、戦中～戦後の混乱期の開墾などによりその大半が未調査のまま平夷されたため、古墳の全容はもとより、その姿形を当時のまま残している古墳はごく僅かである。



第1図 位置図



第2図 周辺遺跡図

●古墳 ■遺跡

- |             |             |              |               |
|-------------|-------------|--------------|---------------|
| 1.八幡山古墳     | 2.前橋二子山古墳   | 3.朝倉天神山古墳    | 4.朝倉薄湯古墳      |
| 5.上川瀬18号墳   | 6.上川瀬26号墳   | 7.朝倉円筒格      | 8.小旦那古墳       |
| 9.朝倉2号墳     | 10.長山古墳     | 11.朝倉1号墳     | 12.少林山古墳      |
| 13.鶴巣古墳     | 14.跡石古墳     | 15.朝倉3号墳     | 16.上川瀬4号墳     |
| 17.前橋天神山古墳  | 18.上川瀬86号墳  | 19.熊玉神社古墳    | 20.大屋敷古墳      |
| 21.上川瀬113号墳 | 22.行人塚古墳    | 23.上川瀬111号墳  | 24.鶴巣山古墳      |
| 25.上商家二子山古墳 | 26.包食塚古墳    | 27.ボウゼン山古墳   | 28.オトウカ塚古墳    |
| 29.龜塚山古墳    | 30.上陽24号墳   | 31.上陽27号墳    | 32.大塚北古墳      |
| 33.山王大塚古墳   | 34.金冠塚古墳    | 35.葉蒔山古墳     | 36.禪養寺東古墳     |
| 37.上陽13号墳   | 38.上陽17号墳   | 39.上陽12号墳    | 40.文珠山古墳      |
| 41.阿弥陀山古墳   | 42.狹塚古墳     | 43.上陽10号墳    | 44.山王若宮遺跡     |
| 45.後閑道路     | 46.後閑II遺跡   | 47.後閑团地遺跡    | 48.坊山遺跡       |
| 49.下佐鳥遺跡    | 50.宿阿内城内遺跡  | 51.東田遺跡      | 52.宮地中田遺跡     |
| 53.川曲遺跡     | 54.上佐鳥中原前遺跡 | 55.公田東遺跡     | 56.公田池尻II遺跡   |
| 57.六供東京安寺遺跡 | 58.六供下堂木V遺跡 | 59.六供下堂木II遺跡 | 60.六供下堂木III遺跡 |
| 61.六供中京安寺遺跡 |             |              |               |

この古墳群を築造年代で追ってみてみると、八幡山古墳（1）の周辺では、300m南東に県内を代表する4世紀代の古墳である前橋天神山古墳（17）（県指定史跡）が昭和43年に発掘調査されている。古墳自体は後円部の中心部分だけが残っているが、県内はもとより、東日本最古の前方後円墳で、3段築成で全長129m、後円径75m、高さ9mの規模である。墳頂部には二重口縁壺形土器が円筒埴輪列のように配列された中に、内法長7.8m、幅1.4mの粘土椁の主体部がある。副葬品には三角縁神獣鏡のほか鉄劍などの武具、斧・鎗などの生産用具等数百点に上る遺物があり、内容的に東日本の古式古墳の特徴を示している。前橋台地に最初に誕生した地域首長の墳墓の一つとみられる。その他、八幡山古墳の西北約1kmの地点にあった2段築成の円墳である朝倉2号墳（9）からも、天神山古墳ほどの出土量ではないが、剣・鉄鎌・斧・鎌などの副葬品が出土している。周堀の内部からは石田川式の壺形土器も出土した。

これに続く5世紀代に入ると古墳の規模が徐々に小型化していく傾向がみられる。鶴巻塚古墳（13）は八幡山古墳の西北約300mに存在していた墳丘長約80mの前方後円墳で、二重の周堀をめぐらし、石製模造品や馬具類などが出土している。出土品から5世紀末頃の古墳と推定される。

5世紀代になると前橋台地東半の地域から毛野の盟主的性格をもつ首長の古墳はみられなくなる。かわって前橋台地の西南の高崎市倉賀野地域に毛野最大の前方後円墳の浅間山古墳や大鶴巻古墳などが5世紀代前半に、更に5世紀中葉以降には東日本最大の前方後円墳である太田天神山古墳や宝泉茶臼山古墳が東毛に造られ、毛野連合政権の盟主的地位をもつ勢力の移動が窺える。

一旦は沈静化した前橋台地の古墳が6世紀代になると再び活発化し始める。この古墳群でもこの時期では、新羅文化の影響とされる金銅製立花冠が出土した金冠塚古墳（34）が有名である。金冠塚古墳は八幡山古墳の南東約2kmに位置する墳丘長約52mの両袖型横穴式石室をもつ前方後円墳で、冠の他、大帶、衝角付冑、金銅製大刀、鉄地金銅張の馬具、金環、銀環等多数の副葬品が出土している。この他にも、金冠塚古墳の北西約400mには円墳の上陽24号墳（30）があり、T字型平面形を呈する横穴式石室からは、大刀や管玉などが出土している。また、6世紀後半にはこの古墳群にも再び墳丘長が100mを超す大古墳が出現する。八幡山古墳の北西約1.5kmの位置に築かれた前橋二子山古墳（2）（国指定史跡）である。前橋二子山古墳は墳丘長104m、後円部径72mの規模を誇る前方後円墳で、葺石が認められている。

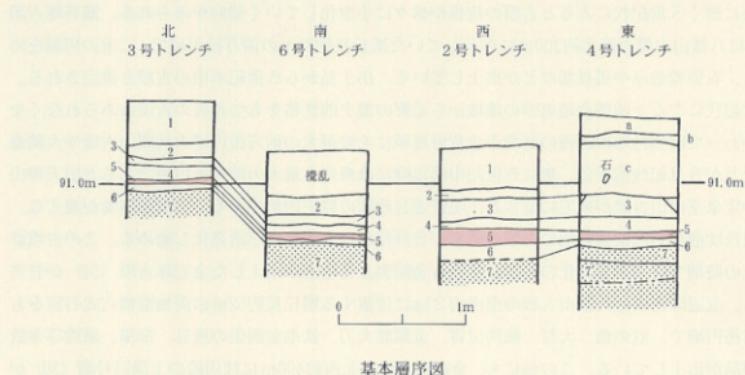
古墳以外の遺跡としては古墳時代前期の後閑団地遺跡（47）、古墳時代後期の後閑II遺跡（46）等の集落跡があげられる。しかし、古墳と同じように未調査のまま開発されてしまったものが多く、本格的な調査が行われているものは少ない。

集落跡以外のものでは、浅間C軽石混土層下水田跡と共に古墳築造につらなる周溝墓群などが公田東遺跡（55）や公田池尻遺跡（56）などで検出されている。

### III章 基本層序とテフラ

#### 1. 基本層序

周囲内の基盤砂層上に堆積している土層を図示したものが下記の基本層序図である。この土層でみると基盤砂層上の6層の黒色砂質土層は浅間C軽石を含み、層厚が5~12cmとバラつきがある。なお、浅間C軽石の純層は認められない。この上層には榛名二ツ岳渋川テフラの純堆積層である5層の黄褐色細砂層が7~12cmほどの厚さで堆積している。この層は全てのトレンチで確認されている。更に4層には黒褐色砂層が15cm内外の厚さで堆積している。この上層には3層の暗灰色砂質土層中に浅間Bテフラが純層で堆積しており、浅間Bテフラ降下時点では表面はかなり安定した状態であったとみられる。



基本層序図

- a 整地のために埋戻した客土 (第3次整地)
- b 整地のために埋戻した客土 (第3次整地)
- c 整地のために埋戻した客土 (第1次整地)
- 1 暗褐色粘質砂層 7.5YR 3/3 粘△ 締△ 暗灰色土を微量に含む
- 2 黄褐色粘質土層 10YR 5/6 粘△ 締△ 暗灰色土を部分的に含む
- 3 暗灰色砂質土層 N 3/0 浅間Bテフラ層 (As-B) 下層部に暗灰色土を含む
- 4 黒褐色砂層 7.5YR 3/1 粘△ 締△ 暗灰色土を部分的に含む
- 5 黄褐色細砂層 2.5Y 8/8 榛名二ツ岳渋川テフラ層 (Hr-Fa) 黑褐色土を部分的に含む
- 6 黒色砂質土層 7.5YR 3/2 粘△ 締△ 浅間C軽石 (As-C) を含む
- 7 黄色細粒砂層 2.5Y 7/8 基盤砂層 下層に鉄分を沈着する 径1cm未満の小礫を少量含む
- 7' 黄色粗粒砂層 基盤砂層 赤褐色鐵分酸化 径2cm程度の小礫を含む

トレンチ調査による旧地形の想定は条件が限定されるが、次の2点に着目した。

- ①周囲外側とみられる部分の自然に近い状態とみられる基盤砂層のレベル比較
  - ②周囲想定部分での基盤砂層レベルの相対比較
- これを表示すると次のようにある。

トレンチ	①周堀外側の基盤砂層標高	②想定周堀内部分での基盤砂層標高	備考
1	トレンチ西端 90.72m	中央部 90.57m	擾乱が多い
2		西端付近 90.65m	
3		北端付近 90.90m	
4	トレンチ東端 91.04m	中央部 90.48m	上層に客土
5		90.73m	上層に客土
6		90.45m	擾乱が多い

周堀の外側では後方部東側及び前方部西側で基盤砂層のレベルが確認されており、これによると北側後方部から前方部へ向かって南方向への緩傾斜を示す地形が想定される。これを補強するように周堀内での基盤砂層も後方部北側を最高にほぼ同じ傾向が看取される。ただ、後方部北東部は河岸に近接しているためか、やや変則的に周堀底面が低くなっている。

## 2. 鍵層としてのテフラ

前項ではテフラを中心みてきたがそれぞれのテフラは地質分野の研究との提携で下表の様な判断がなされており、発掘調査上、重要な判断基準となっている。前橋台地を中心とするローム層の上位に黒ボク土と呼ばれる黒色火山灰土がみられる。この土壌はおよそ1万年前以降に形成された土壌で、この中には多くの示標テフラが含まれている。これらの内、古墳時代以降のものを整理すると次のようである。

名 称	略 称	給源火山	噴出年代	特 微・分 布
浅間A軽石	As-A	浅間山	AD.1783	大量の軽石と火碎流 東南方向関東一帯に分布
浅間Bテフラ	As-B	浅間山	AD.1108	関東全域に分布 灰色や黄灰色等の軽石や灰
榛名二ツ岳伊香保テフラ	Hr-FP	榛名山	6世紀中葉	尾瀬方向の東北地方に分布 発泡軽石中心
榛名二ツ岳渡川テフラ	Hr-FA	榛名山	6世紀初頭	関東地方一帯から東北南部に分布
浅間C軽石	As-C	浅間山	4世紀前半	発泡の良い黄褐色軽石 紙源から東方向に分布

4世紀前半の浅間山噴火に伴って噴出した浅間C軽石は黒ボク土中では黄褐色、水性堆積物中では白色の発泡の良い軽石として認められる。この軽石の下に水田が埋没して発見される事例が多い。古墳時代前期の土師器との照合で噴出時期を遡らせる研究者もいる。

6世紀初頭の榛名二ツ岳渡川テフラは水蒸気爆発と火碎流の発生で特徴づけられる。火碎流堆積物は灰色または桃色を呈し、白色の軽石を含む。最近の遺構・遺物との関係で、噴出年代をやや遡らせて考える研究者も多い。

6世紀中葉の榛名山の噴火で噴出した榛名二ツ岳伊香保テフラは、北東方向を中心に分布して、現在宮城県の仙台市周辺でも層として確認することができる。この噴火では火碎流も発生し、分布域に厚く堆積した。

浅間Bテフラは灰色火山灰の噴出で始まり、比較的薄い堆積をみせるが、その後に続く噴火で厚く軽石を堆積させ、上位に紫色の火山灰が堆積し、田畠を覆って耕地放棄がなされるほどで

あつた。

浅間A軽石は「天明の噴火」として多くの記録でその実態が知られている。おびただしい降灰と軽石の堆積があり、家が潰れたり、田畑に壊滅的打撃を与え、泥流はかなり下流まで影響を与えたとして知られている。

以下、文中においては榛名二ツ岳伊香保テフラをHr-FP、榛名二ツ岳渋川テフラをHr-FA、浅間BテフラをAs-B、浅間C軽石をAs-Cと表記する。

## IV章 平成14年度調査

### 1. トレンチの設定（第3図参照）

今回の調査は古墳周堀部分の範囲確認を主目的として実施した。そのため、トレンチは周堀の立ち上がり推定範囲をねらって、第3図に示したとおり、東西南北全方向に計6本設定した。なお、1次調査においてA・B・Cトレンチを設定し、調査を行っているが、はっきりとした位置が記録として残っていないため、今回改めてその周辺に2号・3号・6号トレンチを設定して調査を実施した。各トレンチの状況は次のとおりである。

### 2. 1号トレンチ（前方部西側）（第4図参照）

今まで民地であったため全く確認の手が入っていない部分に入れたトレンチで、前方部の墳丘裾部の走向に直交する形で長さ24.7mのトレンチを設定した。位置的には墳丘裾部から22mほど離れた位置からの設定である。調査の結果、民地として利用されていた時点での表面からの攪乱がかなり進行している。その中で比較的後世の改変を受けていない部分はトレンチ西端より墳丘方向へ向かって14m～17m付近でプライマリーな土層堆積をみることができる。層序としては基本層序に則っており、5層にHr-FAの純堆積が認められる。この走向をみると墳丘から遠くなるに従い、トレンチ西端より墳丘方向に向かって15m付近では深くなり、14m付近では下層の基盤砂層及び6層の黒色砂質土層と共にやや上向きの傾向を示している。この傾向は他のトレンチの傾向と合わせてみると、周堀の外側立ち上がり部分にみられる傾向で、2号トレンチ・3号トレンチと共に通しており、一応立ち上がりが近いと想定しておきたい。

しかし、13m付近では純層としてのHr-FAはみられないが、4'層の黒褐色砂層中に混在する形で不鮮明ながら認められること、6層の黒色砂質土層は5cm程度の層厚で、As-Cの混入が認められるが、6'層ではAs-Cの混入がみられないことなどから、周堀の立ち上がりが若干西側に延びる可能性も考えておきたい。

また、トレンチ西端から墳丘方向に向かって19m～23mの間の深い攪乱部分は3層のAs-Bの堆積以前の落ち込みがあり、周辺に散見される土師器坏片でみると、平安期の遺構の存在が想定されたが、調査は行っていない。その他、3層のAs-Bを掘り込む中世の溝と思われる痕跡も認められた。

### 3. 2号トレンチ（後方部西側）（第4図参照）

後方部西側中央部に墳丘裾部に直交する形で設定したトレンチである。墳丘裾部から22mほど離れた位置から長さ13.5mで西側道路部分まで及ぶ。全体としては早くから保存が図られた部分のため、後世の攪乱も少なく、最も安定した土層堆積をみせているトレンチである。

7層の基盤砂層部分は現地表下90cm～95cm内外で検出され、ほぼ平坦な状態である。しかし、トレンチ西端部付近では基盤砂層が明確に立ち上がっている。基盤砂層上にのる6層の黒色砂質土層は厚いところで15cm、トレンチ両端部では5cm程の層厚で、層中にはAs-Cが含まれる。その上層にのるのかHr-FAの純層である。層厚は5cm～13cmで、トレンチ全域にみられるが、西

端部付近においては下層の基盤砂層及び6層の黒色砂質土層と同様に上向き、端部に近づくにつれて層厚も薄くなり、西端部では確認が難しくなる。更にその上にのる4層の黒褐色砂層、3層のAs-B、1・2層は平坦な安定した堆積をみせている。ただ、トレント東端から西へ11m～13m付近で近年掘られたとみられる搅乱が2箇所発見されている。基盤砂層、6層の黒色砂質土層及び5層のHr-FAが高まりをみせ始めるトレント西端部付近の様子から、土層が上向く部分を周囲の立ち上がりの下端ととらえ、Hr-FAの確認が難しくなる西端部分を上端ととらえた。この周囲立ち上がりの上端は現道東端とほぼ一致する。

#### 4. 3号トレント（後方部北側）（第5図参照）

後方部の主軸に沿う中央部に入れたトレントで、墳丘裾部から18m間隔をあけ長さ13mに及ぶトレントである。全体的には後世の搅乱の少ない安定した土層の堆積を確認できた。

まず、7層の基盤砂層はほぼ平坦で、トレント北端部より墳丘方向に向かって6m～9mの部分では基盤砂層中の鉄分沈着層が表面に出ている部分があり、基盤砂層まで掘削が及んでいたことが確認される。基本層序の項でも述べたようにこの部分は台地上で最も高い部分に近く、掘削が深部に及んだものとみられる。地表面から基盤砂層までの深さは70cm内外で、他のトレントと比較して浅いのも旧地表の状態と関連するのかもしれない。このトレント北端部近辺では基盤砂層が緩やかに上昇傾向を示している。この状況は1号・2号トレントとも共通の様相で、周囲の立ち上がりの近いことを想定させる。基盤砂層にのる6層の黒色砂質土層はAs-Cを含んでおり、平坦部では5cm内外と薄く、トレント北端部近くで10cmほどになる。

5層の黄色砂質土層のHr-FAはほぼ純層の堆積をみせている。しかし、墳丘西側の1号・2号トレントと比較すると全体に薄く、色はやや淡く多少他の土が混入しているものとみられる。トレント北端部0m～1.5m付近ではHr-FAはやや先端が立ち上がるよう上向きに推移している。また、トレント北端部より墳丘方向に向かって6m～6.5m付近ではこのHr-FAを掘り込み、しかもAs-B降下以前の上幅65cm程の落ち込みが確認されている。

4層の黒褐色砂層は15cm内外の層厚をみせる。しかし、トレント北端部0m～1.5m付近では下層の5層と同様に北端が上向く傾向をみせている。

3層のAs-Bの純層はほぼ下層と同じ堆積をしているが、トレント北端部付近では徐々に消滅する傾向をみせる。これは12世紀初頭段階のAs-B降下時点には周囲が既に埋没した結果の現象とみることができる。トレント北端部から2mほどの地点には、3層を掘り込んだ上幅80cm、深さ20cmほどの落ち込みが確認されている。

#### 5. 4号トレント（後方部北東隅部）（第5図参照）

広瀬川寄りの公園部分で周囲の確認を行ったが、公園造成にかかる土の入れ替えが著しく、旧状を確認できたのはごく一部に限られた。墳丘裾部から東へ10mほどの地点から掘り込んだ長さ16mのトレントを設定した。墳丘裾部寄りのトレント西端部から東へ4m～4.5m付近で両側を濫掘された部分の間に三角形状に残る旧状を留める部分を検出した。7層の基盤砂層は現地表下1.1mの地点にあり、その上層には他のトレントで確認された層序が3層まで堆積している。

ここでも6層にAs-C、5層にはHr-FAが確認できた。この部分の基盤砂層は3号トレンチと比較して42cm低く、広瀬川に向かって基盤砂層が下がる傾向にあり、それに合わせてその上層の堆積もみられる。しかし、いかにも確認された範囲が狭く、不明確な部分が多い。

ただ、トレンチ東端部（広瀬川寄り）で基盤砂層が現地表下70cmで確認されることから、周堀底面との比較で堀の深さは50cm以上となること、及び周堀範囲は墳丘裾部から26mまでは延びていないことは確認された。

## 6. 5号トレンチ（くびれ部東側部分）（第6図参照）

公園造成に伴って植樹が行われた場所の間をぬってトレンチを入れたが、外部から搬入された土砂が厚く堆積したり、樹木根がはびこり土層を搅乱しているため、ほとんど所期の目的が達せられない状況であった。

その中で一部Hr-FAの堆積が確認された部分があり、かろうじて周堀の痕跡を認めることができた。その位置は墳丘裾部から東へほぼ40mの地点で、この数値は墳丘西側の対称の位置と比較しても大きな齟齬はない。また、Hr-FA下にわずかに残っていた6層でもAs-Cを含んでいることが確認された。

## 7. 6号トレンチ（前方部南側）（第6図参照）

主軸に沿う部分で墳丘裾部より20m南の地点から長さ22mのトレンチを設定した。この部分も後世の搅乱が著しく、特に上層部はほとんど旧状を残していない。しかし幸いなことに墳丘裾部より30m付近からトレンチ南端部までは3層（As-B層）以下の土層は比較的よく残存して、多くの情報を得ることができた。

まず、現地表から7層の基盤砂層までの深さをみるとほぼ75cm内外で安定している。搅乱を受けていない部分の土層では3層以下の堆積はほぼ基本層序どおりである。その内、6層は層厚が5cm～10cmでAs-Cを含んでいることが確認された。5層のHr-FAは、墳丘裾部から38m～40.5m付近（トレンチ北端部から南へ15m～17m付近）で中断する部分があるが、5cm～10cmの層厚をみて堆積している。トレンチ南端では基盤層は立ち上がりをみせていないが、Hr-FAの堆積がみられることからすると、この南端部分に堆積したHr-FA範囲が周堀内と考えられる。一方、Hr-FAの中斷部分の土層に石やロームブロックを含むことなど他の部分と異なる部分があること、Hr-FAが直接基盤砂層を覆う部分が認められることなどから、Hr-FAの中斷部分は、不明瞭だが周堀部分の立ち上がりの可能性も考えられる。いずれにしても、確実なことは今後さらに広範な範囲の調査に委ねる必要があるが、今回の調査においてはトレンチ南端部までを周堀範囲と捉えて第8図の周堀想定範囲図を作成した。

## V章 過去の調査概要

### 1. 第1次調査 昭和41年12月・昭和42年2月（第3図参照）

八幡山古墳は外見上では全く周堀の範囲・形状は確認できなかつたため、A・B・Cの3本のトレンチを後方部北側・後方部西側・前方部南側にそれぞれ設定し、発掘調査を行つた。

なお、第3図に示したトレンチの位置は「八幡山古墳周濠調査報告」（前橋市教育委員会 1966）の記載から推定したものである。なお、Cトレンチについては位置の推定もできないため、図示していない。

その結果、次の点が確認された。

#### （1） Aトレンチ（後方部北側）

長さ32mのトレンチで、墳丘裾部では現地表下80cmに基盤砂層に据えられた河原石の葺石根石を検出した。この根石は墳丘部分の土層堆積状況から基盤砂層を30cmほど掘り込んで設置されたことが確認され、その延長上に周堀の存在が確実視されることになった。周堀内の土層は5層が確認され、その推移から周堀部分の幅は26.7m、深さは現地表下80cm前後（構築時の地表面下50cm）とみられた。

#### （2） Bトレンチ（後方部西側）

墳丘裾部にAトレンチと同様な葺石根石を検出した。周堀内の土層は6層に分けられ、4層の砂層が入り込んだ他はAトレンチと同様であった。なお、周堀幅については、設定された24mのトレンチ内では外縁が確認できず、トレンチ延長線上のボーリングで確認した。周堀外縁までの長さは35m前後で、深さはAトレンチと同様である。

#### （3） Cトレンチ（前方部南側）

位置は確定できないが、前方部の南方に設定された長さ47mのトレンチは耕作物の関係から断続的に掘られた。ここでは墳丘裾部の葺石根石を確認しておらず、外縁の堀の立ち上がり部分も未確認である。各部分の堆積状況を比較検討し、得られた所見は、南へ17.5mの地点が周堀外縁と推定された。深さは現地表下70cm（構築時地表より50cm）である。

以上の結果に加えて、ボーリング調査を加味して得られた結論は、次のとおりである。

- ① 周堀は比較的浅いものが存在した。
- ② 当初は、ある程度水が湛えられた堀であった。
- ③ 周堀幅は墳丘裾葺石部から30m前後であると推定される。
- ④ 周堀範囲は東西125m、南北180m内外の方形と想定される。

## 2. 第2次調査 平成11年2月（第3図・第9図・第10図参照）

トレンチは対象地全域をカバーすべく前方部西側の長さ42mの範囲に3本設置し、B（中央）トレンチを対象地の全域に及ぶものとし、周堀幅の確認を目指した（前橋市教育委員会 1999）。

### （1）Aトレンチ

前方部西南側のくびれ部付近に設定した。上層から3層は建物が建てられていて搅乱を受けていた。トレンチ中位にはAs-B混じりの土層を確認した。墳丘裾部で河原石の小口積みの葺石を検出し、トレンチ下位でHr-FAの純層堆積を確認した。遺物は全く検出されなかった。

### （2）Bトレンチ

前方部西側の中央に設定した。周堀の外縁確認のため、長さ36.5mのトレンチになったが、外縁は確認できなかった。上層は後世の搅乱を受けている。周堀中位にAs-Bの純層が認められ、その下層の黒色土層は粒子の細かい泥状のもので湿潤化の状況にあったとみられ、中世まではある程度周堀部分は低かったとみられる。墳丘裾部では河原石の葺石が検出された。またHr-FAについても純層が確認できた。なお遺物は全く確認できなかった。

### （3）Cトレンチ

前方部西側の南端部に設定した。くびれ部先端に近い部分で駐車場コンクリートによりトレンチの長さが制限された。比較的遺存状況の良い葺石を墳丘裾部分で確認した。葺石の間に転落したとみられる器台脚部片が出土した。下部でHr-FAの純層堆積が確認されるなど他のトレンチと層序的には共通している。

なお、出土トレンチは不明だが、赤色塗彩された壺の破片と推定される土器片も出土した。以上の調査によって、次のように全体的所見が得られた。

- ① 3本のトレンチで確認された墳丘裾部の葺石は、Aトレンチ-Cトレンチ間42mの範囲で直線的にのびている。
- ② As-B以前の地層は各トレンチとも共通して安定している。
- ③ Hr-FAの堆積は、墳丘裾部から6~7mの地点から認められ、周堀の埋没状況を推定させる。
- ④ 葺石根石は基盤砂層に据えられている。
- ⑤ 出土した器台脚部は小片であるが、石田川式土器の範疇では比較的新しい時期に比定されるもので、構築時期想定の根拠となるものである。

## VI章 まとめ

### 1. 規模

#### (1) 墳丘

八幡山古墳の墳丘部の発掘調査は今まで行われていない。ただ大正年間に地元の人による盗掘が行われ、後方部墳頂部中央で1.5m下方に長さ数mほどの玉石敷の部分があり、一部粘土を詰めている部分もあったと伝えられている。このことからすると主体部は竪穴系であることが確実視されている。現況で、墳丘は1段目が低い2段築成とみられるが、不明である。

墳丘規模は従来実測図からの数値で、主軸全長130m、後方部幅72m、高さ12m、前方部幅59m、高さ8mと東国最大の規模であるとされてきた。部分的に葺石が検出されていて、墳丘裾部に河原石を38度ほどの角度で葺き上げていることが確認されている。この根石までの深さは現地表から0.8mである（1966年 第1次調査）。

今回、現況を正確に把握する必要もあって、新たに実測図を作成した。あくまでも現況での測量であり、確定した数値ではないが、図上で検討すると次のとおりである。

項目	計測値	晋 尺 换 算	
		25cm尺	24cm尺
墳丘主軸 長	129.5m	518	539.6
後方部 幅	69.0m	276	287.5
高	12.1m	48.4	50.4
前方部 長	64.5m	258	268.7
幅	55.5m	222	231.2
高	8.1m	32.4	33.7
くびれ部 幅	33.0m	132	137.5
高	4.0m	16	16.7

墳丘の構築の基準尺度は晋尺24cmまたは25cmであるとみられているが、各部の数値をこれに当てはめてみると上表のようになる。

この他、大まかな数値でみても主軸長の約半分が前方部長とみられること、くびれ部幅が後方部幅の約半分をとるなど、古墳築造の平面企画に計画性が窺われるが、墳丘部については全く調査の手が入っていないので、正確には後日の調査結果を待ちたい。

#### (2) 周堀範囲の確認

今回の調査結果に基づく周堀を含めた兆域についてみると、主軸の延長上では199m以上の長さとなることが想定される。これから墳丘長を除くと周堀幅は、前方部南で42m以上、後方部北で27.5m以上となる。また、兆域幅に関しては、後方部西側で約35mの周堀幅が確認されていること、及び後方部東側では後世の掘削により確かな範囲が想定できなかったものの堀幅は26mまでは延びていないことが判明していることから、兆域幅は130m内外という段階までつかむことができた。さらに、くびれ部の周堀に関しては、調査結果や旧地籍図からみて墳丘に沿って内側

に屈曲する傾向がみられた。これらのことから考えると、八幡山古墳の周堀は定型的な長方形とはならず、周囲の地形に合わせた可能性もある。深さも当時の地表から50cmほどの浅いもので、前方後円墳のものと比較すると際だった相違をみせている。前方後方墳である高崎市元島名将軍塚古墳（高崎市教育委員会 1981）は、井野川東岸段丘上にあり、墳丘長75m、後方部幅45m、高さ8.5m、前方部幅32m、高さ5mほどとみられている。主体部は粘土櫛で彷彿四獸文鏡、石釧、鉄刀、鉗、人骨などが出土した。周堀は概ね墳丘に沿うように巡るが、不定形で、後方部で幅29m、くびれ部でやや狭まり、そこから前方部に開き、最大幅で45mに達する部分も想定されたが不明確である。周堀は深さがほぼ60~70cmで、全体的に平坦に造られ、罐部の立ち上がりは25°ほどの傾斜で上端と下端の高低差が30cmほどとされている。全体として八幡山古墳の状況とよく似た様相をみせている。足利市の藤本觀音山古墳（足利市教育委員会 2002）は全長116.5mで、周堀は底が浅く幅が約40mほどで、後方部部分は方形に整うが、前方部南側が狭い不正形でこれも八幡山古墳と共通する要素が多いことからすると、北関東地域のこの時期における前方後方墳の特徴であるのかもしれない。

今回の調査で得られた知見と合わせて、旧地籍図をみると次の点が指摘できる。

- ① 後方部北側を東西方向に走る現道は、後閑と朝倉の集落を結ぶ道路として、以前から機能していた。
- ② 後方部西の北西－南東方向の道路も、旧地籍図で確認される道路と平行して設けられており、これは後方部の西辺と平行している。
- ③ ②の道路は、後方部と前方部の接合部分で古墳側に屈曲するが、この傾向は旧地籍図でも確認でき、古墳をとりまく道路と墳丘との関連を推察させる。

上記の所見と第3次調査の結果検出されたHr-FAの堆積範囲を基準に兆域を想定すると、4号トレンチは後世の攪乱が著しく、外縁部の確認はできないが、他の3方向についてはほぼ範囲を推定できる資料が得られた。

後方部西側の2号トレンチでは基盤砂層及びその上層に堆積したAs-C混じりの黒色土層・Hr-FAがトレンチ西端部で立ち上がる傾向をみせることから、この部分を周堀の立ち上がりと考えている。6号トレンチでは、下層にHr-FAが存在しない部分があるが、南端部でHr-FAの堆積が確認できることから、トレンチ南端までを周堀内ととらえ、その立ち上がりは更に南に位置すると推定した。

以上のことから周堀は、次のようなことが確認できる。

- ・ 周堀は全体的に外縁部にHr-FAが厚く堆積する傾向をみせていること。
- ・ 1号トレンチを調査した場所のような平坦な部分では、外側にはHr-FAの堆積が基本的に認められないこと。

このことから周堀はHr-FAの堆積範囲と重複するものと考えられ、これをもとに古墳範囲を推定復元したものが第8図である。

## 2. 築造時期

墳丘や主体部の発掘調査がなされていない八幡山古墳の築造時期については、確実な見解を求ることはできない。そこで、ここでは、墳丘出土土器や周堀の底部に堆積した火山噴出物により築造時期の想定を試みた。

### (1) 墳丘出土土器

八幡山古墳では第2次調査の際、葺石にかかって出土した器台脚部とみられる土器が確実な出土例である。この土器はおそらく埋葬儀礼に伴う供獻土器の一つであることは確実で、この古墳の築造時期と直結するものと考えられる。

この器台は脚高があまり高くなく、表面がヘラ研磨で赤色塗彩されており受部を欠いている。この部分のみの形で判断すれば、襷の端部が水平に近く開く小型のものである。この他に、赤色塗彩された壺の片断とみられるものも出土している。この類例を周辺の遺跡でみると、前方後方型周溝墓が確認された公田東遺跡1号墓では多くの供獻遺物が出土している(群埋文 1997)。その中の器台類似の傾向をみせているP-13では受部が小さく稜をもち外傾して開く形で中央部に貫通孔がある。脚部は外湾して開き、中位に径0.9cmの円孔がある。外面赤色塗彩を施すもので、この脚部が類似している。このほかに元島名将軍塚古墳の4溝中層出土の土器群中の器台に類似するものが認められる他、赤城南麓の荒砥上ノ坊遺跡2区89号住居(群埋文 1995)、高崎市倉賀野万福寺遺跡7号住居(高崎市倉賀野万福寺遺跡調査会 1983)などでも同様な器台形土器が認められる。

その時期は、公田東遺跡がやや先行し、他の遺跡はそれに続く時期とみられ、3世紀後葉から4世紀前半を中心とした時期におくことができよう。

### (2) 火山噴出物

古墳構築時の地表を想定するには、墳丘盛土下の土層を確認することが基本である。しかし、今回行った3次調査のトレンチがその部分まで及んでいないため、ここでは、近接して同じ広瀬川右岸の自然堤防上に位置し、墳丘下の調査が行われた前橋天神山古墳と比較して検討を試みた。左の図は前橋天神山古墳の報文(群馬県 1981)に記述されている内容をもとに作成した前橋天神山古墳の墳丘盛土下の土層の状況を表した模式図である。

八幡山古墳と前橋天神山古墳の土層の状況を比較してみると、次のような相違が認められた。

- ① 前橋天神山古墳では純粹に近いAs-C層が存在し、基盤砂層との間に黒色土層、黄褐色土層、褐色土層の3層が50cmの層厚をみせるのに対し、今回の調査で確認された八幡山古墳周堀範囲の場合は、純粹に近いAs-C層及びその下の3層は存在せず、As-Cが含まれる黒色砂質土層が基盤砂層上に15~20cmの層厚で堆積していること。

盛 土	
15cm	As-C層
15	黒色土層
15	黄褐色土層
20	褐色土層
	地山黄色砂層 (基盤砂層)

前橋天神山古墳 墳丘下土層

② 前橋天神山古墳の純粹に近いAs-C層に含まれる軽石粒は5mmほどの大きさであるのに対し、八幡山古墳の周堀部分の場合はそれより小粒の2mm程のものがほとんどであること。また、今回の八幡山古墳の調査において、一般には基盤砂層の下部にみられる鉄分沈着層が、As-Cを含む黒色砂質土層下に部分的にではあるが直接確認されている。

以上のことから、八幡山古墳の周堀は、As-C層下後基盤砂層まで達する削り出しを行って形成され、その後周りにあった黒色土がAs-Cを含んだ状態で流れ込み、その上にHr-FAが降下したことが土層堆積状況から推測される。

### 3. むすび

毛野地域における古墳出現の背景となったのは石田川式土器文化であったことは既に明らかにされている。その石田川式土器の生まれた地域は、利根川水系の地域とみられている（松島1968）。東海地方西部の土器文化が畿内の布留式土器や東海地方の欠山式土器、北陸系土器などと融合しながら、S字彫を特徴的に持つこの文化が背景となって大型古墳を造ることになる。

八幡山古墳周辺の石田川式土器を伴う遺跡は、近年ようやくその数を増し、その内容が明らかにされつつある。群馬県内への石田川式土器の進出には駿河湾沿岸地域との関係が指摘されている。濃尾平野におけるこれらの土器については廻間遺跡（赤塚次郎 1990）における土器の様相を検討した結果にもとづく編年がなされている。この編年との関連でみると、群馬県内におけるこの系統の土器の波及は、「廻間II式」期で、3世紀中葉以降急速な広がりをみせる。その拡散の様相は単一でなく、他地域や在来文化との融合をみせながら地域ごとに多少の変化をとらえることができそうである。

前橋台地周辺もその例外ではなく、第2図の遺跡でも、後闇（45）、後闇II（46）、六供東京安寺（57）、六供中京安寺（61）、六供下堂木（58）などの遺跡で集落が検出されている。また、公田地区では公田東（55）、公田池尻（56）などの遺跡で周溝墓群が検出されている。八幡山古墳と関連する周溝墓群が発見された公田東遺跡1号周溝墓より出土した土器は、廻間II式併行の時期でも中頃以降（3、4式）に比定されるとみられる。八幡山古墳からの出土器台は、破片のため詳細は不明であるが、脚下端部の所見でみると、受部が小さく、脚高がやや高く、裾が「ハ」の字状に開く形態とみられ、公田東遺跡のものより遅ることは考えられず、むしろ、廻間編年III式にずれこむ可能性がある。

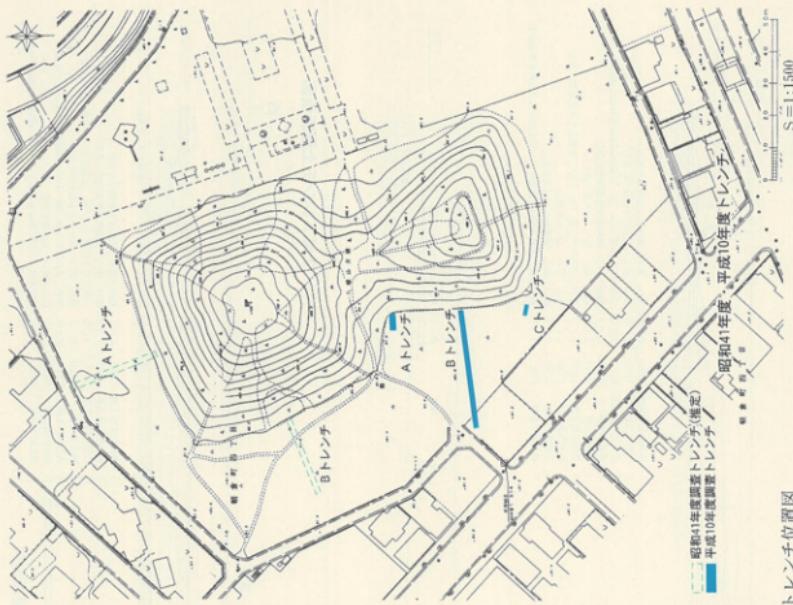
また、群馬県内の編年は確立していないが、これまでの研究（田口一郎 1981・深沢敦仁 1998）によれば、八幡山古墳出土の器台と類似する器台が出土した遺構の年代観でみると、4世紀前半から中葉に当たるとされる一群の遺構との関連がみられると言える。しかし、いずれにしても、出土した器台は破片にすぎないものであり、共伴する土器の組み合わせが不明な現在、この器台片からの時期の限定は不確定なところもある。

ところで、群馬県における古式古墳の在り方は前方後方墳と前方後円墳が対で存在するという特徴を有している（小林 1992）。高崎東部の元島名将軍塚古墳と下郷天神塚古墳、太田西部の寺山古墳と八幡山古墳、太田東部の藤本觀音山古墳と矢場薬師塚古墳と同じように、前橋南部でも八幡山古墳と前橋天神山古墳が対をなして造られている。しかも、この対の古墳は規模も近似し

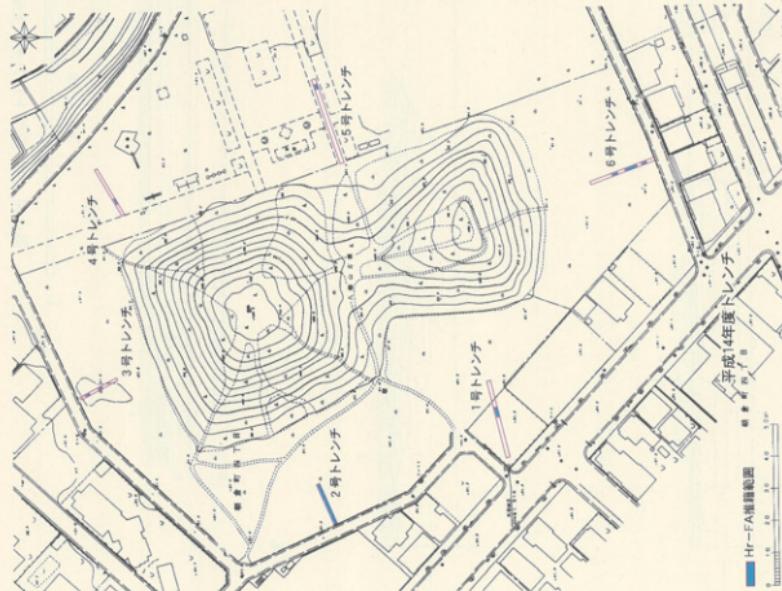
ており、出土遺物からみても築造時期が接近する傾向が指摘されている。ここでは、先に記した土器及び火山噴出物の状況から考え、八幡山古墳の構築は前橋天神山古墳と同時期の4世紀前半のAs-C降下後ととらえておくに留め、両古墳築造の前後関係の究明は、今後の詳細な調査に委ねたい。

#### 参考文献・引用文献

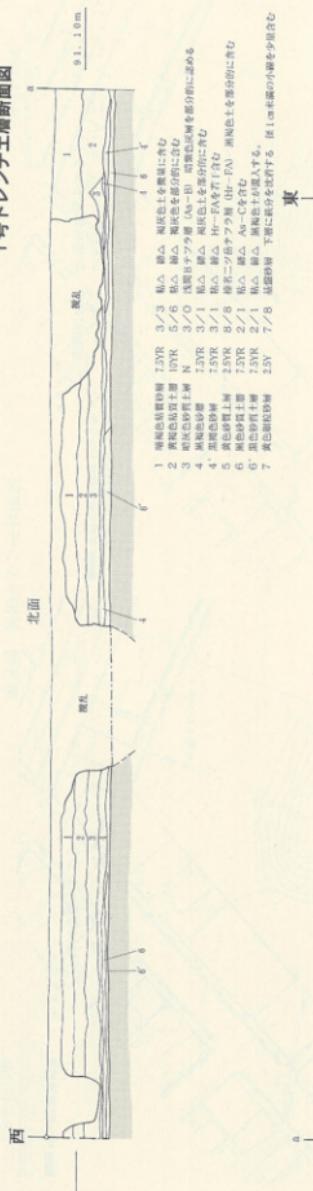
- |                   |      |                                          |
|-------------------|------|------------------------------------------|
| 群馬県               | 1938 | 『上毛古墳綜覧』                                 |
| 前橋市教育委員会          | 1966 | 『八幡山古墳周濠調査報告』                            |
| 松島榮治              | 1968 | 『石田川』 石田川刊行会                             |
| 群馬県               | 1981 | 『群馬県史 資料編3』                              |
| 前橋市教育委員会          | 1981 | 『金冠塚（山王二子山）古墳調査概報』                       |
| 高崎市教育委員会          | 1981 | 『元島名將軍塚古墳』                               |
| 田口一郎              | 1981 | 「IX 遺物の検討」『元島名將軍塚古墳』<br>高崎市教育委員会         |
| 高崎市倉賀野万福寺遺跡調査会    | 1983 | 『倉賀野万福寺遺跡』                               |
| 梅澤重昭編著            | 1987 | 『日本の古代遺跡 16 群馬東部』 保育社                    |
| 赤塚次郎              | 1990 | 「V 考察 1 週間式土器」『廻間遺跡』<br>(財) 愛知県埋蔵文化財センター |
| 小林三郎              | 1992 | 『関東の古墳と地域首長の成立』<br>『新版 古代の日本』 角川書店       |
| (財) 群馬県埋蔵文化財調査事業団 | 1995 | 『荒砥上ノ坊遺跡I』                               |
| 小島敦子              | 1995 | 「2 古墳時代初頭の出土土器について」<br>『荒砥上ノ坊遺跡I』        |
| (財) 群馬県埋蔵文化財調査事業団 | 1997 | 『櫛島川遺跡・公田東遺跡・公田池尻遺跡』                     |
| 深澤敦仁              | 1998 | 「上野における土器の交流と画期」<br>『庄内土器研究XVI』 庄内式土器研究会 |
| 前橋市教育委員会          | 1999 | 『平成10年度 市内遺跡発掘調査報告書』                     |
| 前橋市埋蔵文化財発掘調査団     | 2000 | 『山王若宮II遺跡』                               |
| 前橋市埋蔵文化財発掘調査団     | 2001 | 『山王若宮III遺跡』                              |
| 足利市教育委員会          | 2002 | 『藤本觀音山第5次発掘調査現場説明会資料』                    |
| (財) 群馬県埋蔵文化財調査事業団 | 2002 | 『横手南川端遺跡・横手湯田遺跡』                         |



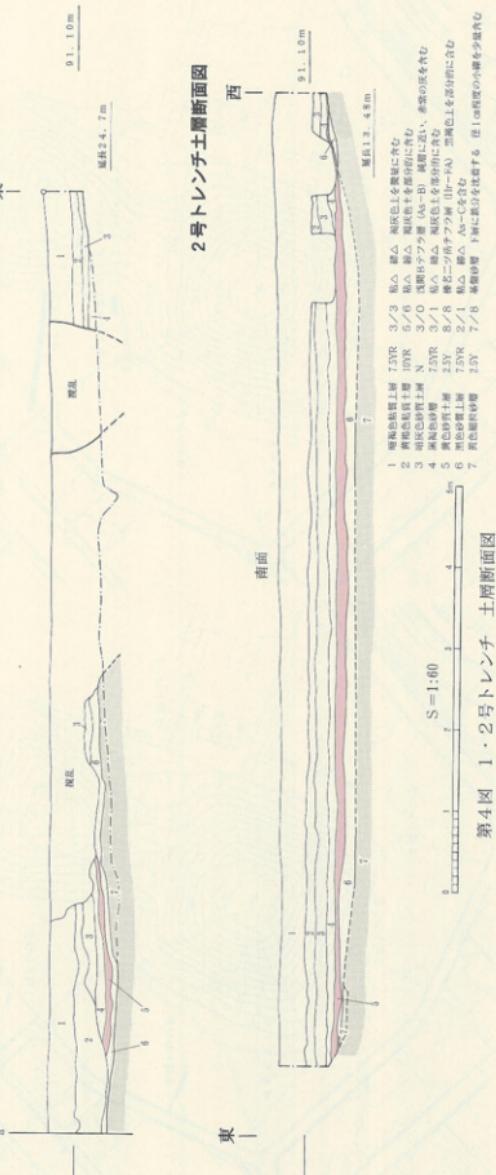
第3図 新旧トレンチ位置図



1号トレーンチ土壌断面図

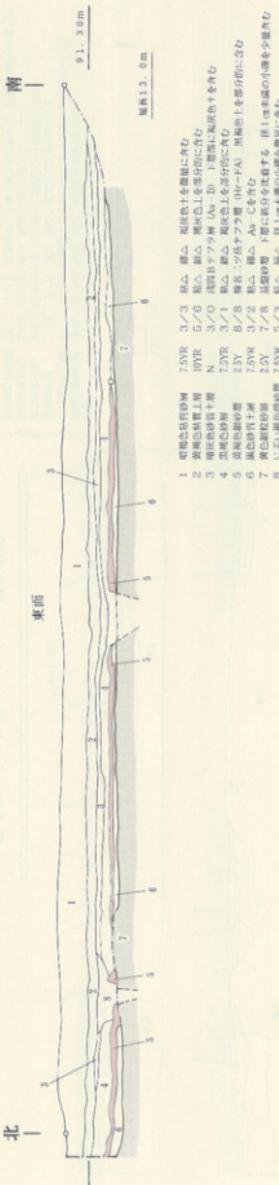


2号トレーンチ土壌断面図

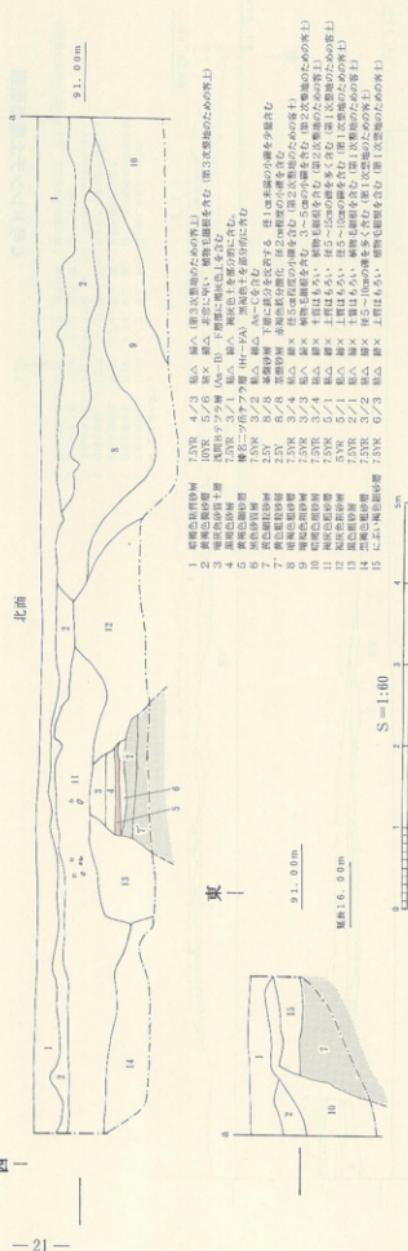


第4図 1・2号トレーンチ 土壌断面図

3号トレンチ土層断面図

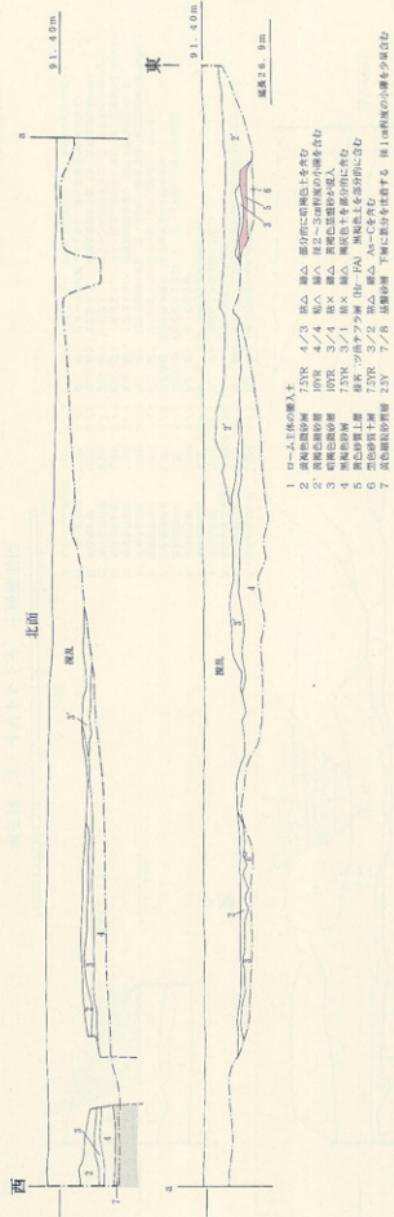


4号トレンチ土層断面図

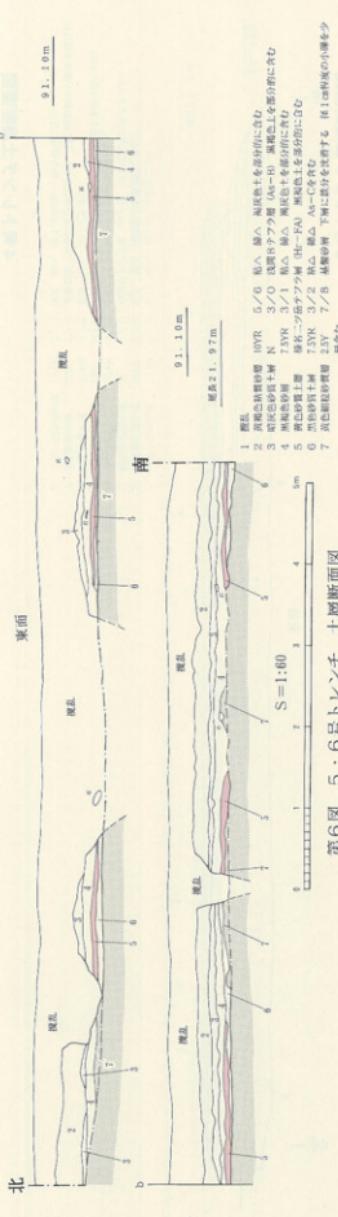


第5図 3・4号トレンチ 土層断面図

5号トレンチ土壌断面図

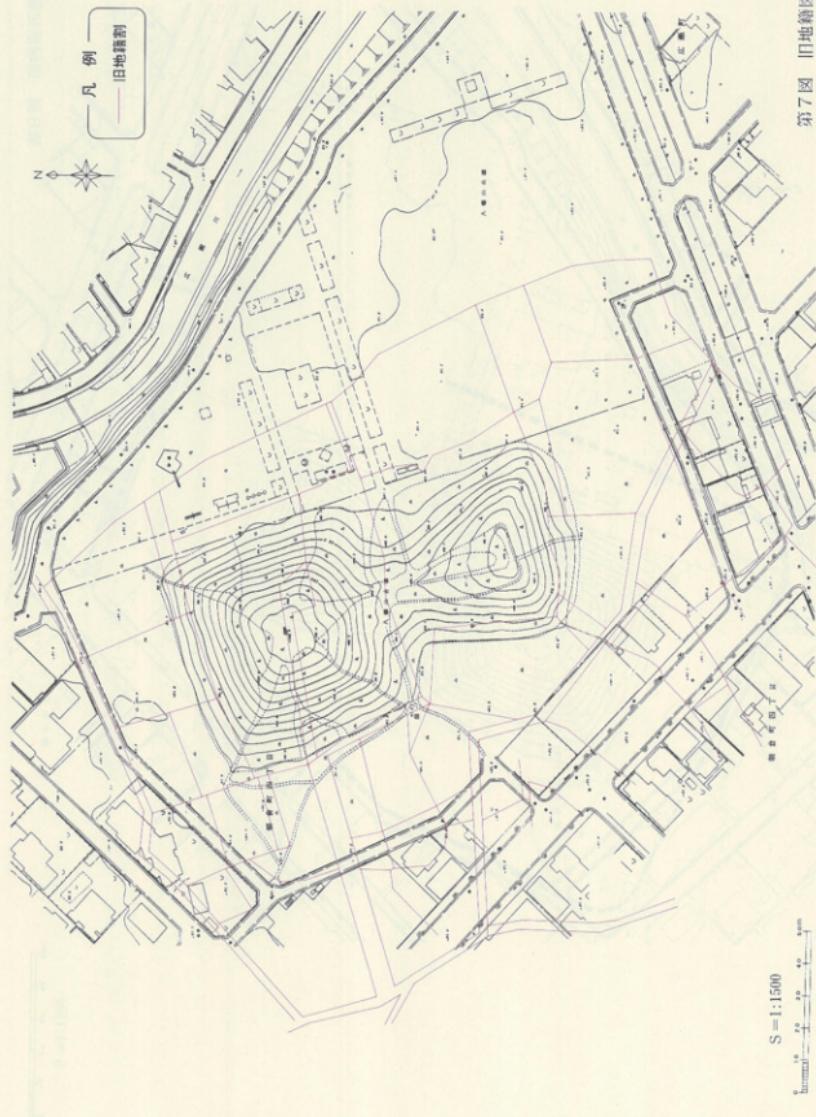


6号トレンチ土壌断面図

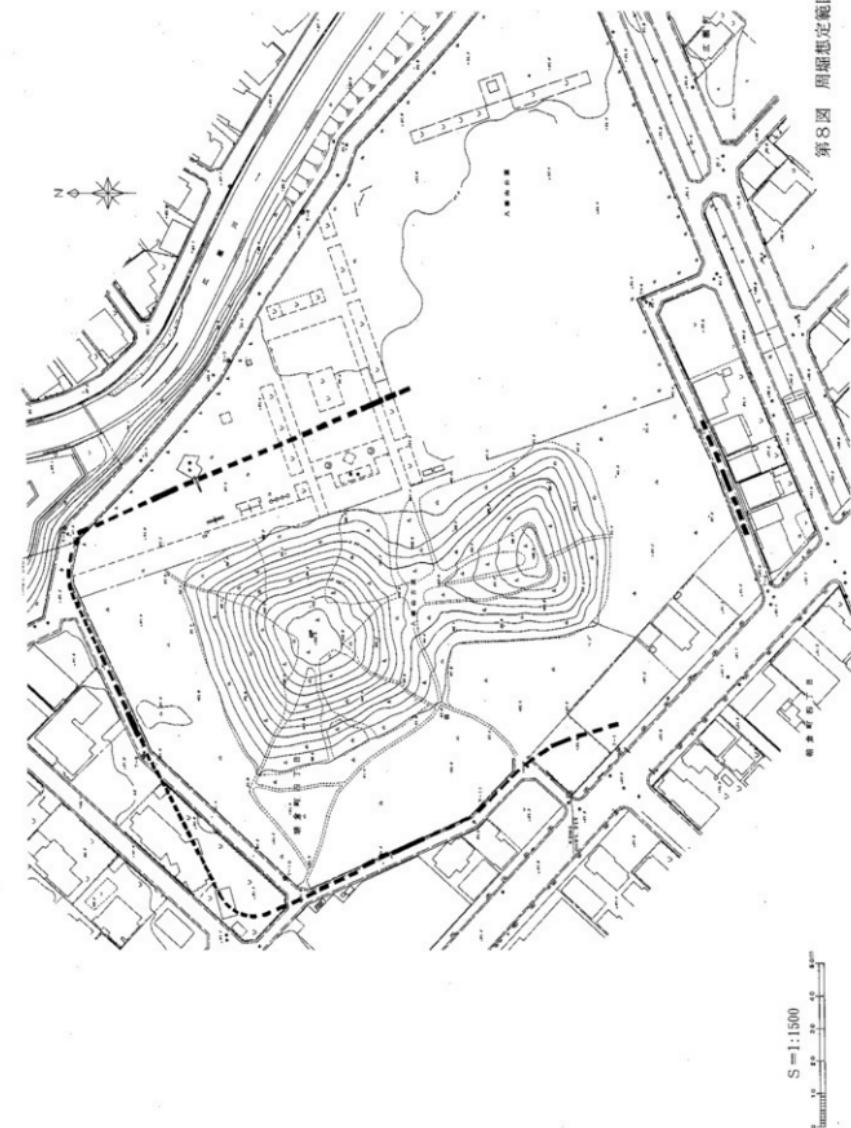


第6図 5・6号トレンチ 土壌断面図

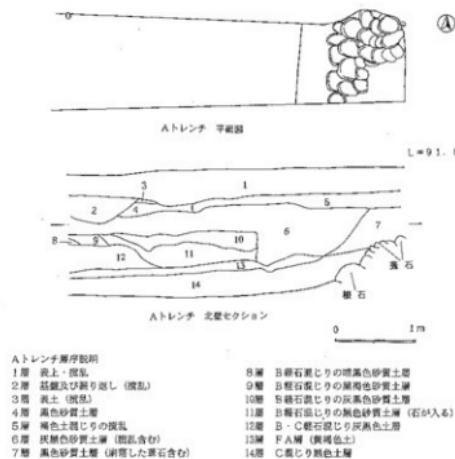
第7圖 田地籍圖



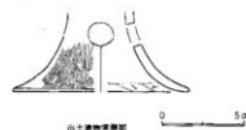
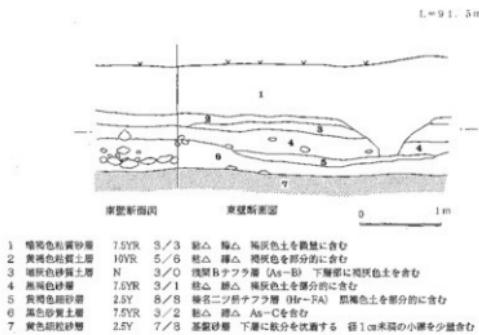
第8圖 周邊想定範圍圖



## Aトレーニチ

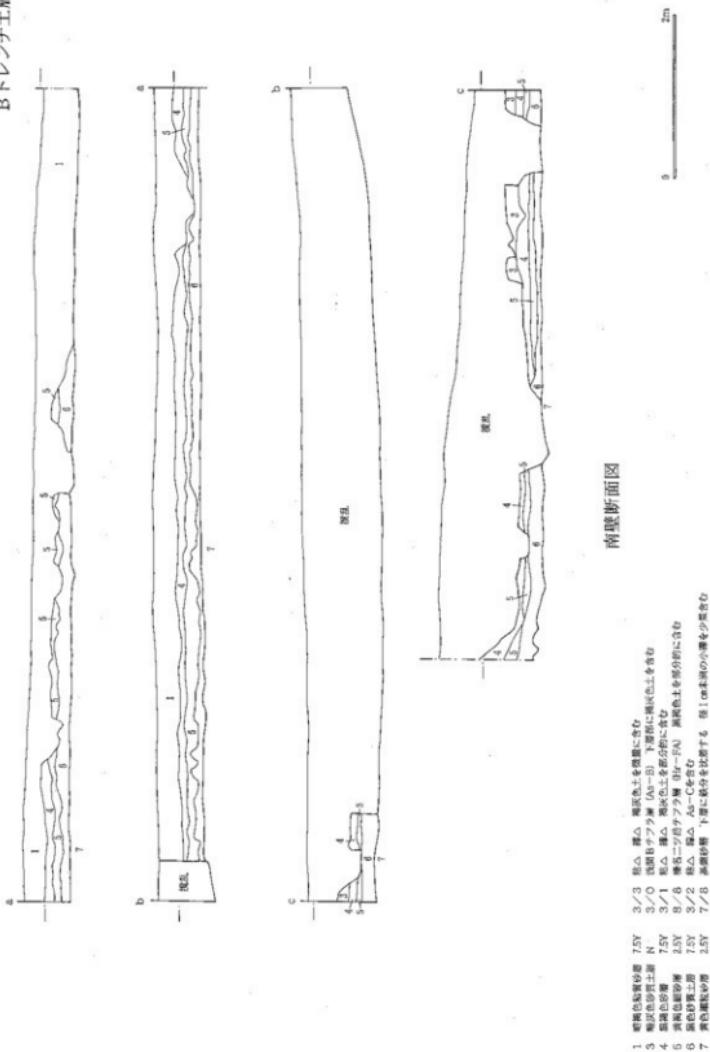


## Cトレーニチ



第9図 平成10年度 第2次調査 Aトレーニチ平面図 A・Cトレーニチ土層断面図 Cトレーニチ出土土器実測図

B レンチ土層断面図



第10図 平成10年度 第2次調査 B レンチ土層断面図



墳丘全景 南西上空から

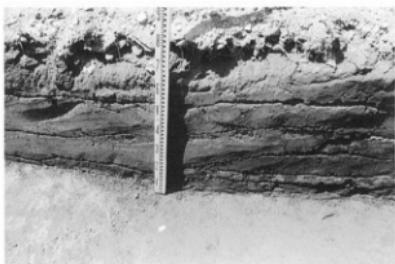


墳丘全景 東から

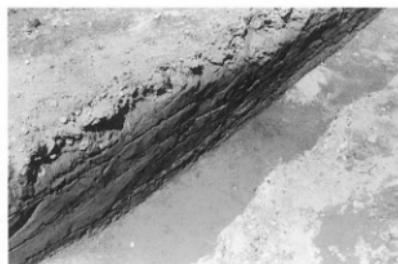
#### 図版1 墳丘全景



1号トレンチ全景 東から



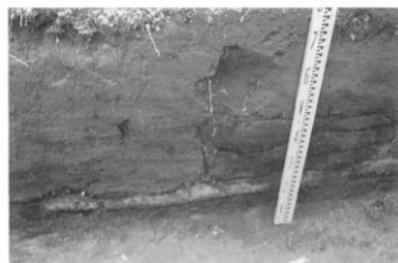
1号トレンチ15m付近北壁



1号トレンチ近景



2号トレンチ全景 東から



2号トレンチ12m付近南壁



2号トレンチ東端部南壁



3号トレンチ全景 南から



3号トレンチ3m付近東壁

図版2 平成14年度 第3次調査（1）



3号トレンチ3m付近東壁



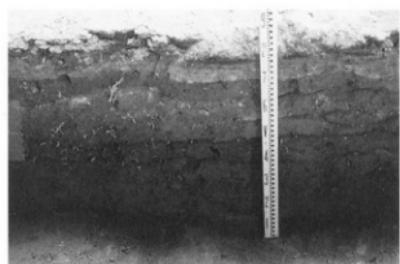
4号トレンチ全景 西から



4号トレンチ北壁



5号トレンチ全景 西から



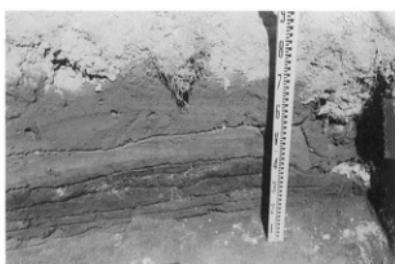
5号トレンチ北壁



6号トレンチ全景 北から



6号トレンチ12m付近東壁



6号トレンチ南端部東壁

図版3 平成14年度 第3次調査 (2)



A トレンチ全景



A トレンチ葺石検出状況



A トレンチ北壁



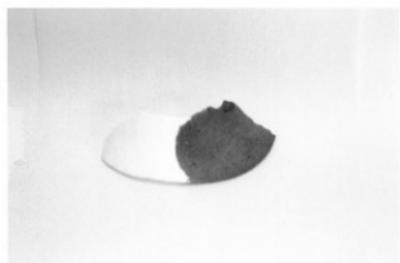
B トレンチ近景



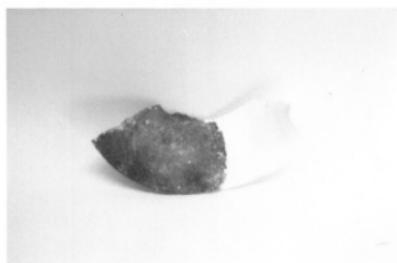
C トレンチ南壁



C トレンチ葺石検出状況



C トレンチ出土 蓋台脚部片 表面



C トレンチ出土 蓋台脚部片 裏面

図版4 平成10年度 第2次調査

## 抄 錄

フリガナ	シセキ ハチマンヤマコフン
書名	史跡八幡山古墳
副書名	範囲確認調査報告書
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	高山剛 小峰篤 井上唯雄
編集機関	前橋市教育委員会
編集機関所在地	〒371-0018 群馬県前橋市三俣町二丁目10-2
発行年月日	2003年3月25日

フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所在地	コード		位置		調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡	北緯	東經			
ハチマンヤマコフン 八幡山古墳	マエバシ シ アサカツマチ 前橋市朝倉町	10201	14G52	36°25'15"	139°07'55"	20020702 20020712	112.8m <sup>2</sup>	追加指定 申請用務

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物
八幡山古墳	古墳	古墳時代	周堀	なし
特記事項 周堀推定範囲の確認				

### 史跡 八幡山古墳

印 刷 平成15年3月18日

発 行 平成15年3月25日

編集発行 前橋市教育委員会文化財保護課

前橋市三俣町二丁目10-2

印 刷 朝日印刷工業株式会社